

「衝突を超えて～9・11後の世界秩序
K・ブース/S・ダン 編 寺島隆吉 監訳」

日本経済評論社 2003
粕谷 裕介

2001年9月11日とは、何であろうか。

アメリカ国内は勿論、世界各国を震撼させた同時多発テロが起こった日です。この日を境にブッシュ政権のアメリカは冷静さを失いました。その後の大統領の発言により、世界の国々がアメリカの「敵」と「味方」に二極化されました。言い換えれば、アメリカを中心とする世界構造、権力構造が完全に露呈したのです。

ここで、その後のアメリカ主導の世界秩序について概略しておきます。すなわち、賛否両論ありながら、ブッシュ政権はアフガニスタンに「対テロ戦争」を仕掛けました。しかし、目的であったビンラディンは見つからず、アフガニスタン国内を壊滅的な状態にしてしまう、という国家的な失態を犯したのが大筋です。更に昨年のイラク戦争に至っては、イラクとテロ集団アルカイダの関係を征伐するという大義名分から、済し崩しにイラクによる「大量破壊兵器」の製造の危険性という大義名分が変わり、これを撲滅し世界平和を守るために「戦争」というよりも「侵略」を仕掛けました。そしてこれもまた、見つかりませんでした。フセインは捕えましたが、正当で明確な理由は何もありません。これに対して世界的な批判があってもおかしくはないのですが、日本の姿勢は飽くまで「アメリカ支持」です。これでは日本の政治的立場は、アメリカの「同盟国」ではなく「従属国」ではないでしょうか。

本書は、9・11と略されるそのテロ後の世界秩序について、アメリカ内外の研究者、学者によって今後の世界を予見した論考集（*Worlds in Collision: Terror and the Future of Global Order*）を翻訳したものです。実は、何を隠そうこの僕が翻訳に参加しています。錚錚たる翻訳者の中で「学生」の文字が輝いていますが、これも偏にお誘い頂き、過酷にも僕の稚拙な翻訳文にお付き合い頂いた寺島美紀子、寺島隆吉両氏にこの場を借りて感謝を申し上げます。

総じて内容は、様々な側面から多様な意見を集

めたものです。例えば、イスラム原理主義による政治支配を「イスラムファシズム」と名づけ、アフガニスタンへの報復攻撃を正しいものとし明



確にアメリカ政府の肩をもつフランシス・フクヤマの論考や、「米国が先導しなければ世界の秩序維持はありえない。それが帝国の使命だ。」とするジーン・ベスキー・エルシュテインの論考があります。一方、中南米やアジアで、多くの独裁政権を支持し、選挙で選ばれた政権を直接または間接的に転覆させる活動を通じて虐殺行為を繰り返してきたアメリカこそ世界最大の「テロ国家」だと主張するノーム・チョムスキーの論考や、「私たちは米国史上かつてない憲法上の危機に直面している」として密告社会・拷問容認へと変貌していくアメリカを鋭く告発するパトリシア・J・ウィリアムズの論考も含まれています。僕の担当した19章のポール・ロジャースの論考によると、今問われているのは、「テロの徴候に対処すると称して予防戦争・先制攻撃・政府転覆に進むか」それとも「テロの根源を解明し、すなわち、米国が中東や第三世界で採ってきた政策を再検討し、それに対処するか」としています。アメリカ政府が9・11のテロ後、どちらの選択肢を採ったかは誰の目にも明らかです。

飽くまで個人的な意見ですが、テレビのニュース報道や番組を見て世界に今起こっていることを把握している気になっては危険だと思います。なぜなら放送番組の性質上、起こっている事件に対して一方向の見方しか出来ないのです。物事には必ず二つ以上の筋の通った考え方や見方が存在するので、一方向的に事件を捉えることの危険性は必至です。

本書は多角的な側面から9・11テロ後の世界の動向について論じていて、世界のこれからの動向に対してまさに冷静で客観的な目を養う意味で良い本です。また、メディアでは報じきれない（意図的に報じない）事実を見抜く指標になることでしょう。今、僕たちがすべきことは、「嘘」を監視する目を養うことだと思います。

かすや ゆうすけ（2003年度英米語学科卒業生）